

2008年、フジ・ロック・フェスティバル出演のために来日した Janet Klein and Her Parlour Boys は東京、横浜、博多で単独公演をも敢行した。同時に彼らはそれらのショウをすべてライブ・レコーディング。全公演のオーダーを変え、公演毎にライブCD-R を発表した (<http://www.hoyhoy-records.com/>)。

あれから2年…… Janet Klein and Her Parlour Boys は新作『Whoopee Hey! Hey!』をほぼ完成させた2010年4月11日、地元ロサンゼルスで再度、ライブ・レコーディングを試みた。場所は、ロサンゼルス国際空港のすぐ南側、エル・セグンドというとてもかわい小さな町にある Old Town Music Hall。地元といっても Janet Klein のホームグラウンドはハリウッドの北側、ヴァレー・サイド。わたしたち日本人観光客もたいていの場合、空港の北側へと向かう。その感覚でいうと、エル・セグンドは空港の裏側になる。

Old Town Music Hall (収容人数は約200名ほど) はサイレント・ムーヴィーの上映館として1968年にオープンした。サイレント・ムーヴィーの演出のために、会場内には、ステージ奥、壁一面にハンドメイドのパイプオルガンがオープン当初から設置されている。The Mighty Wurlitzer と呼ばれるこのパイプオルガンには260ものタブレットがあり、2000を超えるパイプにつながれている。パイプといってもヨーロッパの教会などによくあるキレイな銀色のものではない。表面を覆っているのは木製のパイプ。見た目にも「手作り」感の強いものだ。それに加えて、電話のベルの音や車のクラクション、馬の蹄の音、警官が鳴らす笛など、エレクトリックを排除したシンセサイザー的なオルガン、とでもいえないだろうか……それをサイレント・ムーヴィーに合わせ、オーナーであり、オルガン奏者でもある Bill Field がプレイする。

その、なんともいえないレトロなパイプオルガンをバックに Janet Klein が歌い踊り、そして聴かせ、上機嫌でおしゃべりをした。当初、彼女のプロデューサー、Robert LovelessはOld Town Music Hallでのショウは「雰囲気はいいけど、音響は自分が手がけることになるのでいいとはいえない」と控え目であった。確かに、会場

の雰囲気はサイコーにいいものだ。ノスタルジックなキャバレーは日本にも多く点在するが、どこか教会を思わせるような、それでいて親しみのある Old Town Music Hall は Janet Klein の音楽にピッタリと一致する (写真 <http://www.hoyhoy-records.com/blog.html>)。しかし問題は音響であった。電源は客席最後部にひとつしかなく、それを分け合い、ショウを成立させた。通常、Hoy-Hoy Records はサウンドボードからの音源と会場全体にある空気感を収録するマイクとを合わせたものをライブCD-R に収めている。ところが本作では、電源の少なさと他の理由 (リハーサル時間もほとんどなかった) から後者のマイク2本のみで録音となった。ショウの最中、収録しているサウンドを何度もチェックし、少しでも良質の音源をと試みていたものの、本当にこれで商品化できるのだろうかという半信半疑のまま (毎回そうなのだが) ライブ収録を終えた。

ショウの後、メンバーとの食事会にも参加せず、急いでモーターに戻り、恐る恐る (これもいつものことなのだが) ファイルを開き聴き返してみると驚き! 自分自身がまだ Old Town Music Hall にいるような緊張と浮遊感が蘇ってきた。ショウがはじまったときに沸き起こるワクワク感と居心地のよさが入り混じったような音質ではないか。これはきっと素晴らしいライブ・アルバムになる! そう確信すると、いきなり安堵感がわたしを襲い、ヘッドホンを枕に深〜い眠りに陥ったことはいまでもない。

「素晴らしい音質」(それがどんなものなのか、人それぞれ感覚によって違うだろう。「本当に素晴らしい音」はわたしのなかにだけあって、わたしはそれをことばで伝えることができない) とまではいえないまでも、簡素な音響システムだったことを考えると Live at Old Town Music Hall はよくできたライブ・アルバムだと思う (自画自賛!)。Old Town Music Hall で Janet の歌う姿をみていたとき、これほどの臨場感があっただろうか、と記憶の糸を手繰り寄せようとするが、どうしても思い出せないでいる。ただ、この日の彼女はとても生き生きとしており、おしゃべりも長かった。ライブ後、Robert

Loveless がおしゃべりの部分はカットするようにと話しかけてきた。Janet Klein のファンの方ならおわかりのように、彼女の他愛もない少女のようなはしゃぎぶりはキュートな印象を与える反面、ライブ・アルバムでは意味をなさないこともある (そういうこともあり、おしゃべりの部分はかなり省いた。すべてを収録するとCD-R2枚には収まりきれなかった)。

Parlour Boys の生き生きとした演奏、そしてリラックスした姿勢が、本作を臨場感たっぷりの作品にしたのかもしれない。2年前の来日時にもメンバーだった Marquis Howell (ベース) と John Reynolds (ギター、バンジョー) との息の合ったプレイ。パイプオルガンをバックに Janet Klein もまた特別なものだった。それに加えて40年以上も音楽だけを吸い込んできた建物が今回のような魔法をかけてくれたようにも考えられる。

Hoy-Hoy Records
北村和哉